

Take action for your Future

福井県立武生高等学校 SSH 研究推進部 No.15 R4.1.17(月)

2年探究文科・理科研修旅行

令和3年12月7日(火)～10日(金)に2年探究文科・探究理科の研修旅行が実施されました。行先は福井・石川・京都の近隣地域を対象として文科・理科それぞれの特徴を取り入れた体験を多く含む充実した研修になりました。

【探究理科】

白山砂防科学館

白山はその急峻な地形から、川によって大地が削られ、土砂崩れなどの災害の多い地域だ。砂防科学館で視聴した動画では、大正元年から施工された甚之助谷砂防堰堤群が取り上げられ、白山の地殻変動に向かい続ける施工職人の熱い思いを知ることができた。ここでは急な川の流れを食い止めるための砂防事業の歴史とその防災における役割と大切さを学ぶことができた。



辰巳化学

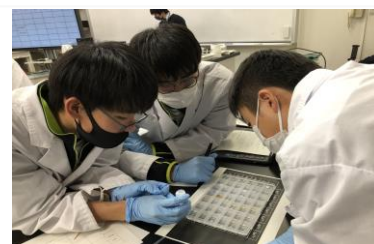
ジェネリック医薬品に関する講義を聴講した後、薬の製造過程において起こりうる事故の対策について、グループワークを実施した。検査体制の改善や機械化の導入、また人為的ミス減らすための人員増や報告・連絡・相談を密にすることなど、ハード面、ソフト面の両面からの対策について、色々な提案がなされた。またその一つひとつの提案について、講師の方から講評をいただいた。社会人として必要な心構えや、協働の姿勢を学ぶことができ、大変有意義な研修であった。



サイエンスラボ研修

<化学>「金属イオンの定性分析」

金属イオンの沈殿や錯イオンの形成反応についての実験と講義を織り交ぜながら学んだ。グループワークでは未知の水溶液について、何の金属イオンが溶けているか、定性分析を用いて自分たちで実験と考察を繰り返し、その結果をプレゼンし、講評をいただいた。



<物理・生物>「光合成色素と光」

生物分野の面からは、光合成色素の抽出原理を講義により学び、実際にほうれん草やシソの葉をすりつぶし、光合成色素を抽出した。物理分野の面からは、自分たちで抽出した光合成色素の性質について、観測を踏まえながら光の吸収特徴を理解していった。



<参加した生徒の感想>

今までは理系科目に苦手意識があったけれど、今回は生物も物理も学んでいてとても楽しかったです。生物の実験は個人的にとっても難しかったが、なんとか成功できた時の達成感が凄かった。物理の光の吸収の話がとても面白くて、私たちが普段見えている色も本当は全く別の色なのかもしれないと思うと今後世界の見方が変わりそうだ。

【探究文科】

同志社大学(今出川キャンパス)

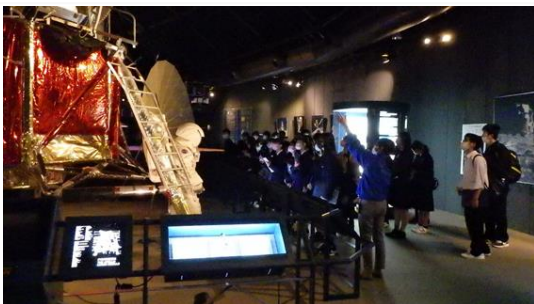
①大学紹介②模擬授業(社会学部/経済学部)③キャンパスツアーを経験。講義内容については、社会学部では「コロナ時代に若者はどう働くのか～ソーシャルメディアにおける承認欲求について～」、経済学部では「経済学は人間が最も合理的な行動を取ることを前提に発し、とあるが、人間は必ず合理的に行動するわけではない」という興味深い内容であった。関西トップの私立大学で、街中にありながら文化財に指定された建物も多く、校内も洗練され最先端の設備が整っている印象を受けた。どのような学びであれ、生徒たちの学びたい内容が将来にわたって意義あるものになることを心から願った。



同志社大学にて

コスモアイル羽咋

シアターで宇宙、特に火星探索に関わる動画を見た後、ガイドの方の解説に従って、館内に展示されている実際に宇宙に行った航空機の一部や、宇宙服について学んだ。ちょうど、ZOZO 創業者の前澤友作さんが、日本民間人初の宇宙旅行に飛び立つ時とも重なり、いよいよ宇宙旅行も身近な話題になる、そんな時代がやってくるのだろうかと思いを馳せた。



コスモアイル羽咋にて

北國新聞

新聞記者の仕事について伺う。北脇氏 2007 年入社以来、社会部、文化部、政治部と多岐にわたって取材されてきた。取材とは、ジャンルによって分かれるが、事件がおきれば、現地に赴いて、警察等に正確な情報かどうか確認する。そして、複数人に確かめる。取材するとき大事なことは、ひとつひとつ疑問を持ったことを確認する。中にはセンシティブな事件もあるが、信頼関係を築いてから数年にわたり取材を続ける場合もあると話してくれた。講義のあと、「1日の新聞記事には何人ぐらいの記者が携わるか」「災害から1年経った後でも記事にするのか?」「誤字脱字はどうやって防ぐのか。」など、10 を超える質問が途切れることなく出て、新聞について理解が深まる時間となった。



北國新聞社にて

講師：社長室秘書部副主任・北脇大貴氏

永平寺

座禅研修では、まず「合掌」「身心一如」を教えていただいた。その次に「座禅」で大事なことは、「調心」「調息」だと教えていただき、さっそく「座禅」に入った。どこまでも静かな時間が続くかのような錯覚に陥った。その後、館内の①僧堂②雲堂③仏堂④大庫院⑤傘松閣それぞれ案内していただいた。いずれも厳かで、外界とは違う空気感であった。

【引率者のつぶやき】 同志社大学では、単に学部の説明や模擬授業ととらえるのではなく、学部・学科で学ぶことが、まさに今、生きていくことに役立つことや、不透明な将来に必要な思考方法ではなかったか。例えば、社会学部や経済学部に関連して、家族関係や会社での人間関係、仕事の仕組みや、給料体系が変化しているという事実、コロナ禍で変化する社会の実情は、これから生きる生徒たちには必要不可欠な内容だった。北國新聞では、まさに新聞記者とは人が事件・事故の事実を伝える尊い仕事だと認識した。事故や災害の取材は、気が乗らないに決まっている。しかし、世の中は楽しい出来事ばかりではない。口だけ調子のいいことを言って終われることでもない。事実を正確に伝えることの大切さ、何回も足を運んで信頼関係を築いて手にいれられる情報もある。第一記者の熱意がなければつとまらない。そして、永平寺では心の立て直し方を教わった。身体を調べ、息を調べて、身体の調子の悪いところを自分で見つけるのだ。自分のことは自分にしかできないのだ。もっと人間臭く生きればよいと思う。人間臭い自分に誇りを持てるようにしよう。自分自身を受け入れてあげよう。同志社大学の鶴飼先生の社会学部の模擬授業の最後は「自己承認」という言葉だったはず。やりたいことをやっている自分を認めてあげよう。そんなことを考えた研修であった。